

卒業論文  
看護師を生きる  
——揺らぎを強要される看護師たち——

2013 年度入学  
九州大学 文学部 人文学科 人間科学コース  
社会学・地域福祉社会学専門分野  
2017 年 1 月 提出

## 要約

本論文は、死が医療化された現代において、病院に勤務する看護師が死をどのように考え、患者と向き合っているのかを看護師の死生観から明らかにし、医療の現場に内在する問題について論じることを目的とする。

はじめに、死が日常から疎遠化された要因が社会の「医療化」であるとする議論を取り上げる。その上で、医療化された現代社会の現状として、在宅死と病院死の比率の推移と医療・福祉政策の変遷をまとめた。

次に、看護師の死生観を調査するにあたり、これまでに行われてきた研究を2点の視座から検討した。第一に、死生観に関する先行研究である。「死生観」という語句がこれまでどのような意味で用いられてきたのかを整理し、本論文における「死生観」の定義をした。そして、これまでの日本人の死生観調査を代表して平井らによる臨老式死生観尺度を用いた調査と、丹下によるKJ法を用いた調査を取り上げた。また、死生観を形成する取り組みとして論じられているデス・エデュケーションについて言及した。第二に、看護師に関する先行研究である。看護師の労働環境を労働時間や賃金などの観点からまとめ、看護師の労働環境に改善すべき点があることを示した。また、死の人称、感情労働、看護の「専門性」のあいまいさについて、主に三井の研究を取り上げて整理した。

つづいて、今回筆者が行った聞き取り調査の概要についてまとめた。分析においては、聞き取りを行った5人の看護師たちの語りの内容を、死生観や職業倫理などの観点から14個の項目に分類した。患者の最期に立ち会う経験が影響しているためか、看護師は死を恐怖であるとは考えず、病院死についても肯定的な態度を示す傾向がみられた。また、看護師たちが実際に余裕を持たない労働環境で患者のケアを行っているという現状も推察できた。

最後に、分析結果から見出された3つの意識について考察した。看護師は「仕事とプライベートは別」という意識と「専門職として職務を全うしたい」という意識を持っており、自身の感情と看護師としての現実との間にジレンマを抱えているという可能性が見出された。そして、看護師の「揺らぎ」という観点から、医療現場における問題点を指摘し、結びとした。

## 目次

はじめに	1
1 現状と動向	3
1.1 死が疎遠化された現代社会	3
1.2 医療化された死	4
1.3 医療・福祉政策からみた死の医療化	5
2 先行研究の整理	6
2.1 死生観に関する先行研究	6
2.1.1 死生観の定義	
2.1.2 これまでの死生観研究	
2.1.3 デス・エデュケーションの必要性	
2.2 看護師に関する先行研究	13
2.2.1 看護師の労働環境	
2.2.1.1 時間外労働	
2.2.1.2 賃金に対する満足度	
2.2.1.3 「看護職の夜勤・交代制勤務に関するガイドライン」	
2.2.1.4 ガイドラインの実施状況	
2.2.2 死の人称	
2.2.3 感情労働という考え方	
2.2.4 看護の「専門性」のあいまいさ	
2.3 先行研究まとめ	20
3 看護師の死生観調査	22
3.1 課題の設定	22
3.2 調査の設計	22
3.2.1 調査方法	
3.2.2 調査対象者について	
3.3 結果と分析	23
4 考察	45
おわりに	47

[注]	.....	48
[参考文献]	.....	50
[付録]		
聞き取り調査票・逐語録	.....	53